



Aobayama Concert

# 第11回 青葉山コンサート プログラム

2019年10月25日（金）17:30-19:00（開場 17:00）

東北大学 青葉山キャンパス 工学研究科 青葉記念会館

主催: 青葉山コンサート実行委員会, 東北大学 総務企画部 社会連携課

後援: 東北大学 工学研究科・工学部, 情報科学研究科

青葉山コンサートは、東北大学の教職員・学生などで運営されている手作りのコンサートで、東日本大震災の後、機械系同窓会より、グランドピアノが工学部・工学研究科に寄贈されたことを契機に始まりました。毎回、ピアノ・弦楽器・管楽器・ボーカルなど、多彩な楽器でさまざまなジャンルの音楽が演奏されており、このコンサートの存在は、東北大学関係者のみならず、広く仙台の音楽愛好者の間でも知られるようになってきております。

さて、今回の第11回コンサートでは、学生・教職員・OBの演奏に加えて、著名なヴァイオリニストの柴生田桂子さん、そしてピアニストの木村奈都子さんのお二人をゲストにお迎えして充実したプログラムをお届けします。今回演奏いただくのはクライスラーの作品集で、柴生田さんは大変なクライスラー通とお見受けします。私はマンドリンという楽器を長年弾いてはおりますが、実は大のヴァイオリン好きで、特にクライスラーの演奏は、若かりし頃、クライスラーが自らの作品を自演するドーナツ盤のレコードを、それこそ擦り切れるくらい聴いた記憶があります。そんなことから、マンドリンでクライスラー作品を演奏することも行っています。本日も、たまたまクライスラーのアレンジ作品を演奏しますが、幸いにもゲストの演奏曲目と競合することがなく、ホッと胸をなでおろしている次第です。

話が余計な私事にまで及んでしまいましたが、今回のコンサートが、本日ご来場の皆様にとって心楽しく、記憶に残るものとなれば、実行委員の一人としてこの上ない喜びです。

青葉山コンサート実行委員

田原 靖彦

青葉記念会館のグランドピアノは、震災後5年を経た2016年3月に心の復興のために機械系同窓会が寄贈したものです。

（ピアノ演奏可能時間：平日 9:30-19:30）

協力：工学部事務部 総務課, 施設管理室

青葉山コンサート実行委員会

村田 智, 中田 俊彦, 桑野 博喜  
川又 政征, 井樋 慶一, 佐藤 達也  
中村 肇, 中山 貴史, 田原 靖彦

青葉山コンサートホームページ

[www.bio.is.tohoku.ac.jp/~aobayama/](http://www.bio.is.tohoku.ac.jp/~aobayama/)



## 第 1 部 (17:30-) 一 般

- 1
- 宮内清孝(Gt)  
情報科学研究科前期2年
- Valse en skai (ワルツ・アン・スカイ) / R. Dyens  
Tango en skai (タンゴ・アン・スカイ) / R. Dyens  
曲中の“skai”はフランス語で、なめし革の意味であり、“まがいもの、～風の”といった意味合いである。これは作曲者が本場のものではないという皮肉交じりのユーモアで題している。その名の通り、R. Dyens による独特な響きが織り込まれた作品となっている。
- 
- 2
- 田原靖彦(Mnd)  
工学研究科 OB  
阿部玲子(Pf)  
賛助
- ロンドンデリーの歌 / アイルランド民謡, F. Kreisler 編曲  
(田原靖彦加筆)  
庭のちようちょ / R. Calace 作曲  
「ロンドンデリーの歌」は、20 世紀を代表するヴァイオリニストであるクライスラーが、皆に親しまれているアイルランド民謡をお洒落なヴァイオリン曲として仕立てたもの。また「庭のちようちょ」は、マンドリン界のレジェンドであるカラーチェによるマンドリン・オリジナル・ソロ曲。今回は、この 2 曲をマンドリンとピアノによるデュエットでお届けします。
- 
- 3
- 佐藤達也(Pf)  
情報科学研究科 教員  
小野 宏(Ct/B)  
賛助
- Everything Happens to Me / M. Dennis  
1941 年、トミー・ドーシー楽団のピアニスト、マット・デニスによって作曲され、トム・アデアが歌詞をつけた。楽団専属歌手のフランク・シナトラが歌い、ヒットした。何をやってもうまくいかない不幸な男の悲しみが歌われている。チェット・ベーカー等、多くの名演が残されています。
- 
- 4
- 高橋みゆき(Sax)  
農学研究科前期 1 年
- 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番ニ短調より  
V. シャコンヌ / J. S. Bach  
音楽の父、バッハが最愛の妻を失った直後に描いた作品。巨匠の精神が楽器に魂を吹き込んで、信じがたいほどの表現を生み出す。このシャコンヌは物質に対する精神の勝利であり、バッハといえども、これ以上の輝かしいものは二度と書き得なかった。  
(P.シュピッター/音楽博士)
- 
- 5
- 星陵アンサンブル  
宮下琳太郎(Vn)  
医学部医学科 1 年  
佐々木優季(Vla)  
医学部医学科 5 年  
高橋糧(Vc)  
医学部医学科 4 年  
八木櫻子(FI)  
医学部医学科 5 年  
匂坂康平(Alto Trb)  
工学研究科前期2年
- Divertimento in G major MH406 より抜粋 / M. Haydn  
ミハヤエル・ハイドン(1737-1806)は、有名なヨーゼフ・ハイドンの 5 歳下の弟です。オーストリア古典派の作曲家として活躍し、後世のモーツァルトやウェーバーに大きな影響を与えました。今回は、彼の室内楽曲の1つであるディベルティメントを演奏いたします。どうぞお楽しみください。

休 憩

## 第2部 (18:30-) ゲスト



### 柴生田桂子 (しぼうたけいこ)

#### Violin

仙台市出身。

桐朋学園大学付属高等学校，桐朋学園大学卒業。ドイツ・デトモルト音楽院に留学。帰国後は内外の演奏会に出演。これまでに，仙台フィルハーモニー，リンツ・ブルックナー管弦楽団，東京シティフィルハーモニー等と協演。その他，室内楽など演奏活動の傍ら，後進の指導にも意欲を示している。2019，及び2020年，宮城県芸術協会音楽コンクール，ヴァイオリン部門審査委員長。



### 木村奈都子 (きむらなつこ)

#### Piano

宮城県第一女子高等学校，桐朋学園大学卒業。ハンガリー国立リスト音楽大学に留学。ソロ，室内楽の演奏会に出演。クラクフ室内管弦楽団(ポーランド)はじめ，現在は，夫でピアニストのコチシュ・クリスティアン氏とのピアノデュオ活動にも力を入れている。

クライスラー作曲

ロンディーノ

愛の喜び

愛の悲しみ

中国の太鼓

ジプシーの女

序奏とアレグロ

終演

フリッツ クライスラー(1875—1962)の没した年を見て、「私の生まれる5年前に死んだんだ」と子供ごころにびっくりしたおぼえがある。「作曲家」というと、大抵は、自分では想像のつかない昔の人…。でもクライスラーはつい最近まで実際に生きていたんだ！ そう思うと、その作品たちが、より一層身近なものに感じられ、なぜか無性に嬉しくなった。

私自身は、バリバリの「レコード」世代。子供の頃から、クライスラーの作品集のレコードをさんざん聴きながら大きくなった。因みに、お気に入りのヴァイオリニストは、ジノ・フランチェスカッティ。しかし、ヴァイオリン学習者にとって、クライスラーの作品と向き合うのは、ずいぶん後になってからである。

ピアノ学習者は、早くからソナチネやソナタに取り組むけれど、ヴァイオリンの場合、まず、ヴァイオリンコンチェルトを学習する。ヴァイオリンコンチェルト即ち、オーケストラと協演する協奏曲だ。ヴィヴァルディ、バッハ、を皮切りにブルッフ、メンデルスゾーン、チャイコフスキー。さまざまな時代のたくさんの協奏曲を学習して、それからやっと、室内楽。ベートーヴェンやブラームスのヴァイオリンソナタを勉強する。

クライスラーの作品群を学生時代に自分の先生にレッスンしてもらったことは、一度もない。という皆さんびっくりするだろうか…。一つはクライスラー作品が、コンクールの課題にならないことが挙げられる。確か、前々回の、仙台国際音楽コンクールの課題にレパートリーの一つとして挙げられたが、稀なことだ。

例外なのは、今回取り上げた「序奏とアレグロ」。これはよく小学生のコンクールの課題曲になっていたりする。非常に技巧的ではあるが、ヴァイオリニストにとって、不条理な箇所がない…。と言ったらいいだろうか。ヴァイオリンのメカニクを知り尽くしたクライスラーの真骨頂。

そんなわけで、私が実際にクライスラー作品を学習しはじめたのは、やっと大学3、4年生あたり。ぼちぼち演奏の依頼があり、「愛の喜び」や「愛の悲しみ」に取り組んでみるわけだが、これがまたなんとも難しい。

技巧的には、パガニーニやサラサーテの作品のほうが難しいはずなのに、いかんせん、昔レコードで聴いた名手の、あの洒落な演奏からはほど遠い。今から考えると、自分の耳に残っている名演をそのまま猿真似して、なぞ

って弾いているだけなので、余計裏打ちがない演奏になってしまったのだと思う。

ヴァイオリンの技巧という、つい左手の素早い動きと思われがちだが、弓を持つ右手こそ、最終的に一番難しい。お三味線も、パチを持つ右手が演奏のキモなのだそうだから、共通したものがあるのだろう。因みに弓は、基本的には持って演奏するものではなく、弦の上に乗せて演奏する。つまり、野球のバットや、竹刀と同じく、常に持ち方にアソビがあって、けして握りしめてはいない。いざ、ココ！という所だけ、持ち上げて、もしくは弓を掴んで演奏する。

今回は弓が弦の上で跳ね飛んでいるような箇所がたくさんでてくる。あれは、弓をうまく掴んで、かつ、弓の、毛の幅を調整して演奏する。(上下する幅ではなく、弦に触れる毛の幅を加減する)

弓の手元で弾くと力強く、弓先は軽やかに、それぞれ弓が弦とあたる場所によって音が違うのはもちろん、ヴァイオリン本体のコマ付近で弾くのと、コマから離れて、指盤といわれる黒い竿付近で弾くのとでは音質が違う。ゆえに、楽曲のこの部分は、弓のどこで、どのように弾くか…。というのは自ずと決まってくる。留学中の先生は「ケイコ！そんな行き当たりばったりな弾き方で、この難しい曲が弾けるわけがない！弓の使い方は、全てオーガナイズされてなければダメ！」と、さんざん口をすっぱくして叱られた。

今回はぜひヴァイオリニストの右手にも注目していただければ、と思う。右手は管楽器でいえば、息にあたるくらい重要で、弦楽器は、右手でうたをうたっているのである。

私にとって、クライスラーの作品群は、一番身近で愛すべきものでありながら、どこか難攻不落…。必ず落とし穴があるような、愛しくもコワイ存在だ。

と同時に、幸せな灯りを胸にともしてくれる不思議な輝きを、つねに放っている…。

最後に私の好きなクライスラー小話をひとつ。(クライスラーはその茶目っ気溢れる人柄から、こんなエピソードは枚挙の暇がない) ラフマニノフとの共演で、大成功をおさめていたが、ニューヨークでの公演中、暗譜があやしくなったクライスラー。演奏中にヒソヒソ声で「今我々が弾いているのはどこだね？」するとラフマニノフは平然と答えた。「カーネギーホールだよ！」

(柴生田 桂子)